
魔女の騎士(イヌ)

椿 冬華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女の騎士^{イヌ}

【Nコード】

N0587Y

【作者名】

椿 冬華

【あらすじ】

昔馴染み曰く酷薄で冷淡だという騎士、オーヴェード。血の香りに酔いながら肉と骨を断つ感触を愉しむ“狂犬”である彼がひとり少女に振り回され、弄ばれ、蹂躪され、犬畜生に成り下がる物語。
※流血描写や猟奇的描写、エロティックな描写がありますので苦手な方はご注意ください※ ※更新は1週間に1話を目処としていますが、場合によってはかなりのスローペースになります※

【00：開始】

この世界には、魔女がいる。

魔法を使う女。

魔性の女。

魔なる女。

悪魔の女。

魔女の定義は多々あれど、この世界における“魔女”はたった一人しか指さない。

全ての生命を司り、全ての自然を従え、全ての現象を蕩けさせる存在。

何故魔女が存在するのか、魔女は何故存在し続けているのか。

魔女の存在理由とは何なのか。魔女の存在意義とは何なのか。

そもそも、“魔女”とは何であるのか——

その何もかもが、謎に包まれた存在。

けれども魔女は確実にいた。

何百、何千、もしかしたら何万年もの間。

“魔女”は常に存在し続けていた。一秒の間もなく、一瞬の空白もなく——常に魔女は世界と在った。

これは、そんな魔女の住む世界で起きたひとつの物語。

【魔女の騎士^{イヌ}】

【01：狂犬】

ワインレッドの薔薇で埋め尽くされた大陸、ボルドー。

広大かつ、肥沃な土壌に恵まれたボルドー大陸は草木や動物に愛されており、春や夏には大陸を緑黄色の絨毯が覆い、そして秋になるとその絨毯が茜色に染まる。冬になれば白銀色の冷ややかながらも美しい絨毯が登場してくる。

それだけでなくそれらの絨毯の上には常に、ワインレッドの薔薇が色付いている。ボルドー大陸の中央部に位置している王都の周辺となると草木の絨毯を埋め尽くさんとはかりに薔薇の花が咲き誇っており、王都付近にある山の頂から見下ろせばそれはそれは見事な紅蓮の絨毯にしか見えない。

——そしてここはそんなボルドー大陸の南西に位置するエトワールという町である。

街と言うには少々小さく、村と言うには寂れてもいない小ぶりの町。その東に位置する辺境騎士団エトワール支部にて——俺は、ひとつ息を吐いた。

春の昼月、12が日。

年中枯れることなく咲き誇り続けている薔薇で周囲を囲い、何時でも武器を持って飛び出せるように広い出入り口が設けられている支部は今日も、忙しい。

「ヴェド、南にお菓子の家が出現した」

「またか」

幼馴染の部下の言葉に俺はチツ、と小さく舌打ちをした。

視線を下に向けた拍子にばさりと無造作に伸ばしている少々くすんだ木肌色の髪が頬にかかる。そろそろ切るか、などと無感情に考えながら前髪を後ろに撫でつける。

――俺の名はオーヴェード・バラム。

長ったらしくて煩わしいミドルネームは省略。昔馴染みや家族からはヴェドと呼ばれる、この名は響きがよくなかなか気に入っていたのだが：この名は当時酔っ払っていた父によって適当に名付けられただけのものであり、かつ意味が“下僕”であると最近知って色々と複雑な心境だったりする。

先祖代々続いてきている侯爵家の当主を父に持ち、己自身も伯爵の地位を25になる頃に受け賜った。10になる頃から騎士団の下で騎士となるべく心身ともに磨いていき、武勲を認められて一代限りの伯爵の地位を手に入れると同時に辺境騎士団エトワール支部の隊長の立場も手に入れ――現在に至る。

まあ一代限りの伯爵の地位とは言っても、長男としていずれ侯爵を継がなければならない身にある。俺としては次男にその地位を継がせたいところだが、次男は研究馬鹿で日夜研究所に籠っている。望みは薄いだろうな。

「既に町人達が総出でお菓子の家を分解しにかかっているよ。特に子どもたちは大喜びだ」

「そうか」

昔馴染みであり、部下であり、辺境騎士団エトワール支部の副隊長でもあるアイザック・ラバンの言葉に俺は無感情な返事を返す。

俺の素っ気無い言葉にアイザックは苦笑を零した。

くすんだ木肌色の髪を無造作に伸ばし、肩あたりで適当に切っているだけの俺と違ってアイザックは己の身なりを最低限度に小奇麗にしている。丁寧に切り揃えられた錆色の髪がアイザックの動きに合わせて揺れ、錆色の瞳もにん、と愉快そうに細められている。その笑みにはもちろん、俺のような無精髭などない。

昔からこいつは常に笑みを絶やさなかった。いい意味でも、悪い意味でも。常に飄々としていて何を考えているんだか企んでいるんだかよく分からないアイザックだが、常に絶やさない笑みと無駄に整ったパーツが人気を呼び、町の女性からは“微笑みの騎士様”などと持て囃されている。俺からしたら“嘲笑の騎士”だな。

「“魔女” 殿も飽きないねえ」

アイザックが面白がっているんだか嘲っているんだか判別しづらい笑みを浮かべながらそう口にする。

――魔女。

声に出さず、口の中でその単語を零す。

魔女。この世界に常に存在し続けているという、魔女。

幼い頃に母親が読み聞かせくれた絵本の中では世界を幸せにするために魔女が存在するとされている。

教育係が用意した教科書の中では世界の命運を握る存在として魔女が説明されている。

騎士見習いとして騎士団に入った頃に聞かされた話の中では国を護る為にも決して逆らってはいけない存在として魔女が認識されている。

そして、現在——様々な立場にある大人からの声が耳に入るようになった現在では——“魔女”は世界そのものであるという意識が強いように感じられる。

そんな風に魔女の定義についてはひどく曖昧だ。俺自身も、“魔女”が一体何であるのかわからない。

そもそも魔女自体も、幼い頃に先代の魔女をちらりと見たただけだ。魔女というモノが本当にいるのかどうかすら怪しい。ただのお伽噺で、モチーフ的な意味をこめて魔女という立場を作り上げたただけなんじゃないのかとも思ってしまう。

けれども“魔女”に関して、ひとつだけ言えることがある。

——魔女はこの世界に要らない。

「ヴェド、顔怖いよ」

無意識のうちに眉間に亀裂を刻みこんでいたのか、俺の顔を見たアイザックが肩を竦めてきた。

しかし表情を緩める気になれない俺は眉間に皺を刻みこんだまま顎を撫ぜる。無精髭が手の平をざりざりと刺激してきて、剃った方がいいかなどと関係ないことを脳の片隅で考える。

「ヴェドは本当に魔女殿が嫌いだね」

「——無意味な悪戯ばかりをする“魔女”の為に騎士団はあるんじゃない」

この世に存在する魔女はひとりだけだとされている。何故そうなのかは知らないが、魔女は常に一人で、常にこの世界に

存在している。そしてこのボルドー大陸を支配しているロゼルージュ王国はそんな魔女を保護し続けている。

詳しくは知らないが、魔女が生まれた時にロゼルージュ王国が魔女を保護し、死ぬまで王都に置けらしい。そして魔女が死んだ瞬間、また新たな魔女が生まれて——王国はその魔女も保護する。その繰り返しは何千年も続いているようだ。

俺が魔女を見たのは幼い頃。

ロゼルージュ王国の要である王都エテルに構えられた王族の住まうエテル城。そこに父と共に訪れた時、国王の傍らに黒ずくめの陰鬱そうな女性が佇んでいた。アレが魔女だと父に聞かされた時、絵本に描かれている艶やかな魔女とは違いすぎて驚いたものだ。29年の人生の中で魔女を目にしたのはあの一度きりだ。

父曰く、あの魔女は見た目の通り性格も陰鬱で、公式な場でない限り表に出ようとはしなかったらしい。俺が王都に訪れてすぐに死んでしまったが——…今も生きていてくれたら良かったのに、と常々思う。

この世界が自分のモノであるかのように面白可笑しく暴れ回る魔女より、何もせず引き籠ってくれる魔女の方が数十倍いい。

「無意味な悪戯、ねえ。果たしてそうかな」

「無意味だろう。この行為に何の意味がある」

先代の魔女が死に、新たに生まれた魔女は——酷く奔放な性格らしい。

今の魔女は先代と違って引き籠るつもりなどないらしく、日夜王都の各地に出没しては悪戯をしていく。そして気紛れに、ここエトワールのような遠方の地にも悪戯を振りまく。毎日、気紛れに、無意

味に。

ある日は牛がピンク色になり。

ある日は砂糖菓子雨が降り。

ある日は七色の空になり。

ある日は馬に翼が生えて飛んでいたり。

ある日は――菓子の家が出現したり。

無意味にして無価値、無価値にして無意味。あまりにも愚かしい悪戯。何の思考も理性も論理性も持ち合わせておらぬ、愚か（バカ）な餓鬼の悪戯。

我々騎士団は毎日、その悪戯に振り回されてばかりだ。魔女の悪戯によって東西南北奔走してばかりの、くだらない毎日。

騎士団は餓鬼の悪戯の後始末の為に存在するんじゃない。それなのに、騎士団は魔女に振り回されてばかりだ。

――腹立たしい。

愚かな魔女めが、と知らぬ内に己の口がそう形容した。

それをアイザックが不敬になるよ、と窘めてきたが俺は魔女などに敬意を払うつもりなんざない。俺はこんなくだらない事をする為に騎士になったんじゃない。

「――：見回りに行ってくる」

行き場のない魔女への苛立ちが完全に燃焼せぬまま、俺は木肌色の髪をぐしゃりと掻き上げながら辺境騎士団エトワール支部を後にした。

名に“星”の意味が込められているエトワールという町は全体的に

燻ったような砂色をしている。白きを尊きとしている王都に比べる
と随分と暗い色合いをしているし、舗装された石造りの道も少々凸
凹としている。が、王都より遥かに離れた田舎の町にしては小奇麗
であるし、治安も悪くは無い。

10年前、俺がこの町に来た時は酷い治安状態であった。しかしそ
れからの10年間で随分と良い方向に変わったし、町の状態も安定
している。10年前には怒声と悲鳴と嗚咽が支配していた町は今や、
朗らかな笑顔と歓喜に包まれたものとなっている。

楽しそうな笑い声や弾むような話し声を耳にしながら砂色の石畳を
無感情に歩いていく。

“戦う為に在ろうとするな、護る為に在れ”

騎士見習いとして厳しい訓練を受けていた時に毎日のように聞かさ
れていた言葉。

騎士とは護る存在であり、決して戦う存在ではない。空気を震わせ
る数多の声に耳を傾けろ。石畳を震わせる数多の足音に耳を傾けろ。
心を震わせる数多の心に耳を傾けろ。断じて、騎士は戦う為に戦っ
てはいけない。

そうあの人は繰り返して囁いていた。その囁きに俺以外の騎士見習い
の殆どは心打たれていたようだが、俺は未だにその言葉の意味を理
解出来ずにいる。

耳に入ってくる楽しそうな笑い声や弾むような話し声。これを聞け
ば騎士が何の為に在るのか分かるとあの人は言っていたが、29に
なった今でも分からないままだ。

戦う為に戦ってはいけないのならば、何故毎日剣術や棒術、格闘技
の訓練を駆の自由が効かなくなるまで繰り返すのか。何故毎日模擬
戦闘を行って感覚を常に鋭利にしておかなければならないのか。

護るか否かという理由の違いだとアイザックは言っていたが、何かを護る為であっても結局戦うことに変わりはない。どのような綺麗事を並べようと、最終的には騎士は戦わなければならないのだ。

それなのに、何故戦う為に戦ってはいけないなどと抜かす？

「――…、…」

町のざわめきにぼんやりと意識を軽く手放していた俺は軽く頭を振って思考を切り替え、見回りに徹すべく周囲に気を配った。

“魔女”が悪戯をし、騎士団がその後処理に狩り出される度にこうして騎士の存在理由について想いを馳せてしまう。

騎士は戦う為に在り、決して魔女如きの為に在るのではない。力無き人々を護る為に在るのだという甘い幻想を盾に戦う存在でもない。常に戦いに身を置き、戦うことなき者どもの代替品として戦い続ける。それだけの――存在。

最終的にいつもその結論に届くのだから考えるだけ無駄だと分かっているのだが、どうもついつい考え込んでしまう。はあ、と小さくため息を吐きながら砂色の町を練り歩き続ける。

一応ここ、エトワールには住んで10年になるし、隊長として務めるようになってからも4年経つ。だから町の人々からは既に顔を覚えられているし、辺境騎士団エトワール支部の隊長として認識もされている。

しかし俺の、アイザック曰く酷薄で冷淡な表情が恐怖を誘うのか、町の人々から声を掛けられることは滅多にない。町中を見回っている現在でも、町の人々は俺と目線を合わせようとしなない。それどころか怯えたように俺から離れ、遠巻きに俺が去るのを待ち続けると

いう有様だ。

“ 狂犬 ”

いつだったか、そう称されたことがあった。

自分が狂っているという自覚は無いが、他人からしたら狂っているように見えるのだという。

騎士は人々の抛り所で在るべきだと国王が常に唱えているし、俺に指導をしてくれたあの人もそう言っていた。だからなのかどうかは知らないが、仲間の騎士や従士の殆どは人々と常に交流を持ち、人々の助けになろうとしている。それがこの国での“ 普通 ” なのだから、人々の抛り所で在ろうとしない騎士はさぞ狂っているように見えるのだろう。まあ、そう思われているからといって何かがあるかないか。俺は何とも思わないし、変えようとも思わない。

「……ふー…」

また下らぬ事にぼんやりと思考を飛ばしてしまった、と自省しながらカツ、と靴を鳴らす。

騎士の証である銀色の鎧は一步足を踏み出す度に小さく金属音を立てる。ガシャガシャと喧しい音を立てるのは好かない故、心臓部や関節部など、戦闘時に攻撃を受ければ戦闘続行に支障をきたしてしまいうような箇所を護る程度の防備で済ませている。

王都の王国騎士団となると騎士の見本で在る為に常に全身装備していなければならないと聞く。きっと俺は王国騎士団ではやっていけないだろうな。

「おや、オーヴェードさんじゃないか。見回りかい？」

ふいに横から親しげにそう声かけられ、眼球だけをそちらに向けてみれば底抜けに明るい笑顔を浮かべた中年の女性が立っていた。

名をデボラと言う彼女は行きつけの肉屋の夫人であるのだが、職業柄なのか肩幅がかなり広く、女性にしては体格がいい。頭に巻かれたパンダナの下で揺れている栗色のポニーテールが彼女の笑顔に合わせて揺れていて、まるで尻尾のようだな、などと思ったのはここだけの話だ。

「主人はまた二日酔いか？」

女性にしては体格がよく、かつ身長も高い彼女ではあるがそれでも俺に比べると小さい。まあ、とは言っても2メートル近くある俺からしたら大抵の人間は“小さい”ものとなってしまおうが。

行きつけの肉屋を営んでいる夫婦は俺の、アイザック曰く酷薄で冷淡な表情にも動じない数少ない人物だ。夫婦揃って似たような体型を維持しており、その体型に見合う朗らかな性格から町の人々には慕われている。

肉屋である夫婦だが、単なる肉だけではなく揚げ物や炒め物などの惣菜も販売しており、一人暮らしの身である俺にとっては大変助かる存在となっていた。その関係もあってか、肉屋の夫婦とは町で擦れ違う度に挨拶をする仲となっている。

「そうさね。だから今日はあたしが配達さ」

「酒は飲んでも吞まれてくれるなよ、と伝えておいてくれ。酔っ払いの処分は御免被る」

「ははは！伝えておくよ。オーヴェードさんに言われたとなっちゃああの人も酔いが覚めるだろうさ。」

肉屋の主人が酒に酔うという事態は珍しいことではなく、これまでに何回か酔っ払って深夜の町中を徘徊する主人を捕獲——もとい保護したことがある。

その度に騎士は酔っ払いなんかの為にあるんじゃない、と主人の胸倉を掴んでガクガクと揺らしていたが、反省の色は少しも見られない。果たして俺の言葉如きで酔いが覚めるのかどうか。

「しっかし…」

ふいに夫人の声色が幾らか高くなったのを感じ、俺は眉間の皺をさらに深くした。こういう声を出す時の夫人には付き合わないが吉。そう考えて別れの言葉を切りだそうと口を開く。

「見回りの途中だから——」

「アンタってばもう29だろ？そろそろ結婚とかしないのかい？アンタ男前なのに勿体ない！アンタ顔怖いけど、なかなかハンサムだって町の若い娘さん達の中では言われているんだし、そろそろ若い娘さんを嫁に貰ったらどうだい？そーいやアンタの好みってどんな娘さんなんだい？やっぱ若い娘さんがいいかねえ。あ、でもあんまり若すぎる娘さんは遠慮しなよ！成人したばかりの娘さんとか特にね！貴族の中にはそういう娘さんを囲う特殊な嗜好の男がいるみたいだけれど、アンタは違うんだろ？あ、そーいや若い娘さんじゃなくて30、40代のおばさんを囲う貴族もいるって聞いたねえ。あらまさかアンタの好みってアタシだったりするかい！？だとしたら嬉しいねえー！あと20年くらい若かったらアンタに一目惚れしていただろうさ！」

——…遅かった。

肉屋の夫人による息継ぎの間も与えぬトークに俺は辟易とし、額を手で押さえる。その間にも夫人のトークは続く。

この町の中で気兼ねなく接することのできる数少ない“知人”ではあるのだが、いかなせんこういうところが玉に瑕だ。

「ちょっと聞いているのかい？ アンタはさ、もっと笑うべきだよ。

アンタは笑えばすぐく男前なんだから！と、いうか見せておくれよ！ アンタと出会ってからもう随分経つけれど、アンタの笑顔なんてこれっぽちも見た事がないよ！ なんだい、アンタの顔は樹脂でできていたりするのかい！？ 雑貨屋の息子さんを見習いな！ あの子はアンタのように男前でもハンサムでもないけれどね、笑顔がそれはもうステキなんだ。あの笑顔にアタシを含むおぼちゃんたちはメロメロさ！ アンタも笑えばきつとアタシ達おぼちゃんたちをたちまち虜にしてしまうだろうよ。がんばんな！ そうそう、聞いておくれよ――」

「……………」

トークに継ぐトーク、話題転換に継ぐ話題転換。一体何処で酸素を取り入れているのか分からぬ夫人の話に俺は最早何も言えなくなり、早く終わらぬかと意識を遠くへ飛ばした。

狂犬も夫人の前には形無しである。

「――あら、いやだ。配達途中だったのを忘れていたわ！ じゃあねオーヴェードさん！」

「あ？ あ、ああ…」

今回は配達途中で遭遇したということもあってか、いつもより早く解放されて心底ほっとする。

嵐が去った後のような何とも言えぬ解放感と虚しさを覚えながら俺はふらりと見回りを再開すべく脚を動かす。

――その刹那だった。

「何かが落ちてくるぞー！！！！」

町を交う人々のひとりが何処までも続く晴天の空を指差しながら悲鳴のように叫び、それにつられるような形で町の人々が一斉に上を見上げる。

俺も追従して空を見上げれば、確かにそこには晴天の空に似つかわしくない物体があった。赤い糸を線引きながら落下してくるそれの人々は瞬時にパニック状態に陥り、それまで不規則ながらも賑やかな足音を響かせていた石畳が酷く乱雑で粗暴な大量の足音を響かせる。

そんな周囲にひとつ舌打ちをし、すう、と大きく息を吸った。

「騒ぐな！！」

アイザック曰く枯れた老人のような声、を肺活量の許す限り張り上げる。

俺の声は余程響いたのか、先程までのパニック状態がまるで夢であるかのように乱雑な足音と逃げ惑う声が止み、不自然なほどに痛々しい沈黙が流れる。怯えや恐怖を孕んだ沈黙ではあるが静かになったことには変わりない、と沈黙が切れぬ内に二の次を継ぐ。

「何が落ちてきているのかは知らんが、放物線の軌道からしてまずこの町には落ちない。しかし落ちた時の衝撃がある可能性は否定できない、だからここは無闇に歩き回らず衝撃に備えておくように。」

これは本当だ。

晴天の空を穢すように赤い線を引いているその物体はここからじゃあ何であるのか判別できないが、軌道を見てもこの町に落ちるということはない。

「騎士団が後ほど指示を下す、無闇に動き回るな」

辺境騎士団エトワール支部の隊長の言葉は流石に絶大であったのか、俺の言葉に周囲の人々はこくこくと頷き、衝撃に備えて建造物から離れた。

その様子を見届けてから支部に戻るべく身を翻す。その間にも上空の放物線はさらに線を伸ばしていき、その形態をくっきりと表していく。どうやら落ちてきているのは球体のようであるということとは分かったが、それ以上は分からない。

おそらく今頃支部でもパニックになっているだろう、と俺は歩む足を早める。

「ヴェド！」

支部に辿りつく途中でアイザックが至極真摯な表情で駆けつけてきた。流石にこの状況下では常に絶やさない笑みも消すか。

「アイザック、支部はどうなってる」

「混乱に陥りかけたけど、すぐ治めたよ。今はエトワールの各地で起きているであろうパニックを治めるために出動してもらっている」

「そうか」

ここまでは概ね予想通り。

後はあの落下物がどこに落ちて、どんな影響を与えてくるかだな。

「どこに落ちるように見える？」

「んー…あの軌道からして、多分エトワールの森じゃないかな」

エトワールの町から小さな草原を挟んだ向こうに広がるエトワールの森。

立ち入り禁止となっている奥地を除けばエトワールの森は豊富な資源の倉庫で、商店の人々も資源調達の為によく訪れている。

「あ、落ちる」

アイザックの危機感を全く覚えさせない、ある意味危険なすつとぼけた声に俺は上を仰ぐ。

思った以上に落下速度が速かったようで、赤黒い球体が放物線を描きながら町の南にぐんぐんと伸びていく。それからはひと刹那で、先程まで遙か上空でゆったりと線を伸ばしていた落下物は瞬きの間も与えぬ内にエトワールの頭上を越えて南部へと消えていった。

即座に衝撃に備えて身を低くするが、それは杞憂に終わったようで落下物が目視出来なくなって数秒か経ってもなお想定した衝撃は襲ってこなかった。

「…落ちたのかな？」

「……さあな」

衝撃も何もなく、後に残ったのは赤い放物線だけであるというあまりにも静かすぎる結果にたたり、と冷や汗が出る。

被害が出ないのは結構だが、何も起きないというのも逆に不安を煽る。

「…とりあえず各地の混乱を抑えた後、町から出ないよう触れを出しておけ」

「了解」

俺の言葉に短く応えてその場から去っていったアイザックには視線もくれず、ただ空を見上げて未だ色濃く残っている赤い放物線を眺める。

——何が終わる。

何かが変わり、何かが終わり、何かが始まる。

そんな——妙な“予感”に俺はじわり、と汗ばんできた手の平をきつく握り締めた。

上空に残る赤い放物線が歪んだ笑みに見えて、さらに身が硬くなる。

——そしてその“予感”は当たっていたと、数日後痛感する羽目になる。

【01..狂犬】
了

【02：勅命】

“王の名において命ず。エトワールの南部に墜落した竜の卵を手厚く保護し、王都まで届けよ”

王都からの達しを大幅に省略するとこんな感じになる。

色々突っ込みたいところはあったが、とりあえずエトワールの森に落下したのは竜の卵らしい。

「ふうん、魔女殿がそう言ったんなら間違いないだろうね。」

落下物騒ぎがあつてから数時間程した頃にロゼルージュ王国の紋章を刻みつけた羊皮紙をスノウバードが運んできた。

雪降る日に生まれる純白の鳥、スノウバードは非常に人慣れしていて、かつ聡い。それを利用して文書のやりとりにはもっぱらスノウバードが用いられる。教育したスノウバードを何十話も飼っている配達小屋が各町にひとつは必ずあり、人々が文通する際に用いられている。

そしてそれは王都も同様で、ただし国王からの勅命など重要な文書の場合は王族専用のスノウバードが使われる。そして今、辺境騎士団エトワール支部にいるスノウバードは王族専用のスノウバードだ。

チチチ、と小さく鳴きながらこちらの様子を窺っているスノウバードに視線を向けたまま、俺はため息を吐く。

「厄介な」

王都でもエトワールの方へ落下していった物体については認識されていたようで、王都からの文書によると別大陸から飛来してきたものらしい。

“魔女”が――落ちてきたのは竜の卵だと、言ったらしい。

竜。

人間の数百、数千倍もの体格を有する鱗に覆われた巨大な怪物。巨大な翼で空を自由に駆け回り、口からは灼熱の如き紅蓮の炎を吐くとされている。

図鑑や歴史書でしか見た事はないが、ボルドー大陸より海を挟んだ向こうにある、人の住まぬ別大陸には竜が住んでいるらしい。そこから卵が何故ここまで飛来してきたのかは知らないが――

「……“魔女”ならば魔法なり魔術なりなんなりで転移できるんじゃないのか」

出来ぬ事は何も無いと言われている魔女ならば竜の卵くらい、わざわざ俺達に頼まずともどうにでもできるだろう。

それなのに魔女は何もせず、ただ落下物が竜の卵であると口にしただけ。

――怠惰な。

「確かにそうだよねえ。魔女殿はそれこそ世の理さえも捻じ曲げる事が出来るって言われてるくらいだし…国王がちょっとお願いすれば転移くらい出来そうだよねえ」

「……………勅命である以上、無視するわけにもいかん。――騎士団を召集しろ」

俺がそう指示を下す前にアイザックがもう召集を掛けていたようで、数分もかからずにエトワール支部の騎士団が集合した。

今は治まっているにせよ、数年前まで治安の悪かったここにはそこそこの身分で、かつ地位に執着がなく、実力もある騎士が派遣されている。だからか、自然と筋骨隆々な無骨の集団が出来上がっていた。

エトワールの町出身の若い従士も多くいるため、そこまで暑苦しい空間というわけではないが。

基本的にロゼルージュ王国における“騎士団”は騎士と従士から成る。

貴族のみが成れる騎士と、平民が成れる従士。

財務関係や整備関係、人事関係と実際は細かく分類されているが、おおまかに言えば騎士団は騎士と従士の2種類が存在している。

騎士にしても従士にしても実力主義で、生半可な能力を有しているのみでは騎士団に見習いとして入る事すら難しい。そんな狭き門を潜り抜けて騎士団に入ったのがここにいる者達なのである。

ついでに言えば、騎士団は王国騎士団と辺境騎士団の2つが存在しており、王国騎士団に入るにはさらに狭き門を潜り抜けなければならない。

徹底した実力主義、それがロゼルージュ王国の騎士団である。

「知っているだろうとは思いますが、王都から勅命が届いた」

辺境騎士団エトワール支部の会議室にて、50人余りの騎士と従士に言葉を向ける。

俺の隣ではアイザックが壁にエトワール地方全体の地図を広げている。

「これから部隊を編隊して、エトワールの森に侵入して竜の卵を搜索する」

今回の任務は至極単純。

“エトワールの森に落ちた竜の卵を王都へ届ける”

しかし実際、それを成すにはそれなりの日数を掛けなければならないだろう。

エトワールの森は広く、深い。もし竜の卵が深層部に落ちたとなれば2、3日では絶対に見つけられない。深層部は鬱蒼と生い茂った木々の所為で薄暗く、かつ大量の魔物が生息する危険区域でもあるのだ。普段は立ち入り禁止にしてあるが、竜の卵の落下地点によっては深層部への侵入も考えなければならない。

今現在アイザックが竜の卵の落下地点を軌跡から予測している。その結果に従い、竜の卵を搜索する部隊を考えなければならない。

「隊長！」

ふいにその時、会議室の入り口付近で直立していた従士が鋭く声を上げた。

ちらりとそちらに視線を向けてみれば、従士は入り口から顔を出して廊下を眺めているようだった。

「スノウバードが来ています！入れますか？」

「…入れろ」

俺の無感情な返事に従士は勢いよく敬礼をし、会議室から出ていっ

た。

そして窓を開けるような小さな金属音がしたのち、従士が戻って来ぬ内にひらりと一羽の白い鳥が会議室に入ってくる。チチチ、と唄うような調子で鳴きながら俺の肩にひらりと着地して、ぽとりと一枚の羊皮紙を落とした。ロゼルージュ王国の紋章が入っているそれは間違いなく、王都からの達し。先程勅命が届いたばかりなのを考えると勅命を出した後すぐ飛ばしたものでだろう。

間髪いれずアイザックがそれを受け取り、能面のような笑顔を浮かべたままそれを開いた。

「——ん、手間が省けたっぽい」

「何だ？」

「竜の卵はエトワールの森深層部にある“星の泉”に落下したみたいだよ」

どうやら勅命への補足だったようだ。

しかしピンポイントで場所が判明するところを見ると、それも“魔女”の力のように思えるが……いかなせん何故わざわざ俺達の力を借りるのか、そこが理解に苦しむ。

そもそも“魔女”がどんな力を使えるのか、それ自体よく分からないんだがな。単に転移は使えないだけなのかもしれない。

「星の泉か……。よくもまあ、うまく落ちたものだな」

「魔女殿が軌道を逸らしたのかもねえ」

「……それはともかく、星の泉となると少々厄介だな」

星の泉はその名の通りエトワールの森の深層部にある泉で、魔物たちの水分補給場ともなっている。つまりは魔物の巣窟と真ん中。そこに行くとなると魔物との連戦が予想される。魔物一体のみならば鍛え上げられた騎士団には何でもないが、複数となると話は違ってくる。

「今回は少数精鋭で行く。大量の魔物に多勢はただの餌でしかない」
基本能力がヒトのそれよりも遥かに高く、特殊な能力も持ち合わせている魔物に対しては多勢で向かうよりも、経験豊富な手練で確実に狩りに行った方が安全だ。

そう考えてぐるり、と会議室の中にいる面々をざっと流すように見回す。俺の視線の意味に気付いたのか、半数の騎士と従士が姿勢を正して俺を真っ直ぐに見据えてきた。
やる気は十分。結構なことだ。

「俺とアイザック。それにアレフ、ベス、ギーマル。ダレス、ヘイ、ヴァヴ、ザイン、そしてケスだ。」

相も変わらず無感情な、平淡な――いや、俺の場合は冷淡だろうか。ともかく感情の起伏を込めずに淡々と今回の編隊メンバーを挙げる。名を呼ばれた者達はみな一様に敬礼をしたが、名を呼ばれなかった者達は僅かに落胆の色を瞳に滲ませながら肩を落とした。中には安心したように息を吐く者達もいたが、その者達はみな若く未熟な騎士や従士であった。

今回名を呼んだメンバーはみな手練で、魔物との戦闘経験もかなり積んでいる。

町に残留する騎士団の力が根こそぎ落ちるような事にならないよう、バランスを考慮しながら選抜した8人――俺とアイザックも含めて

10人、これで竜の卵を搜索しに行く。

「今日の残り時間で馬車や食糧、武器などの調達をしろ。明朝――日の出と同時に出発する」

目指すは星の泉――そう連ねた俺の言葉に被せるように8人の選抜メンバーの力強い返事が上がった。

その返事に頷きつつ、アイザックの方に視線を向ける。

「アイザック、了承した旨を王都に届けろ。明朝に出ることも」

「了解」

アイザックはそうとだけ返してにこり、と腹の読めぬ笑みを浮かべて羽ペンを手にとった。

今回のメンバーは騎士である俺とアイザック、アレフとザイン。

それに従士であるベス、ギーメル、ダレス、ヘイ、ヴァヴ、ケス。

星の泉付近ではおそらくアイザックの立てる作戦を要にして、俺とアレフが先陣を切る形になるだろう。馬車はベスとギーメルに任せるとして：防備に関してはケスとヘイに任せれば奇襲を受けるようなことにはならないだろうな。ダレスとヴァヴ、ザインは先陣を切るであろう俺とアレフに追従する形で魔物に攻めていくと考えて間違いない。

みな魔物に対する経験値は高い、決して怖気ついたり勝手に突っ走ったりはしないだろう。本来ならば若い騎士や従士達に経験を積ませる意味も込めてエトワールの森搜索をさせたかったが：星の泉だと判明した以上、止むをえまい。

エトワールの森にいる魔物は基本的に牛型の、猪突猛進型が多い。獲物を見ればすぐ突進してくる脳なしの魔物だ、倒すのはそれほど難しくは無い。決して弱くは無いが、特性さえ知っていればそれ程体力を消耗せずに戦える相手だ。

しかし深層部となると魔物の数が飛躍的に増加する。以前、牛型魔物10体と対峙したことがあったが：今回もそういうケースにブチ当たるだろう。いくら魔物の特性を知っていても、次から次へと突進されてしまったら回避行動に意識を向けざるを得なくなってしまう。攻撃に転じることが難しくなってしまう。

下手なことにならぬよう、しっかりとアイザックと作戦を練っていく必要がある。

そこまで考えてふと、自分の口元が吊り上がっていたことに気付いた。

「……………」

他の者たちには気付かれていない。

それに安堵しつつ、正直な自分の軀——いや、感情か？それに対する小さな苦笑が心の中で漏れる。

これから経験するであろう魔物との戦いに、軀が喜びを覚えている。夜の町で一夜限りの女を抱く時とは比べ物にならぬ快楽と興奮が手を震わせている。両手に剣を握り、牛型魔物の弱点である柔らかな喉笛に剣を深く挿し込んだ時の弾力ある感触。そして剣を引き抜いた時に浴びる生温く、生臭い鏑の液体。赤黒い液体を噴出させながら乾いた岩石同士を擦り合わせた時のような声で苦痛に呻く魔物がこちらに向けてくる、絶命の瞬間の瞳。

——ああ、ぞくぞくする。

知らぬ内にふるりと震えてしまう唇を抑えるように舌でぺろり、とひと舐めする。

今すぐにでも剣を抜いて駆け出したい気持ちを抑え、くるりと軀を会議室の出入り口の方へ向ける。

「今回、選ばれていない奴らは来い。俺達が不在の間について説明する」

表面上では辺境騎士団エトワール支部の隊長としての体面を繕っているが、その腸の奥底はふつつと煮え滾るような欲望で満ちている。

下腹部がずくずくと疼き、それを堪えんと下腹部に力を込める。その行為すらも興奮に繋がりが、背筋から肩、肩から腕と快感にも似た痺れが走る。

戦いの前は、いつもこうだ。

――ああ、明日が待ち遠しい

逸る気持ちを抑えてちろりとまた舌を出し、唇を潤わせる。

そうして春の昼月、12が日は終わった。

――春の昼月、13が日。

1年の中で最も寒い冬の昼月から4ヶ月経った今、気候は温かなものになりつつあるがそれでも未だ冷気は残る。前月、つまり春の朝

月に比べると随分と春らしくなっているものの、やはり冬の気配は抜けない。冬の気配は春の夜月に入る頃に完全に抜けるだろう。

ひんやりとした空気が肌を刺す中、俺達は馬車に乗り込む。そして朝日が昇る方角の空が白んできた頃にエトワールの町から一輛の馬車が軽やかな蹄の音と共に発車した。

「まずはエトワールの森の立ち入り禁止区域境界線まで向かう。昼までには着くだろう」

「そっすね。そこまでは魔物もそれほどいやせんし、特に何事もなく行けるでしょうね」

俺の言葉にそう返したのはアレフという騎士だ。短く切り揃えられた栗色の髪が揺れている下で人の良さそうな笑顔が零れている。

俺と同格、もしくは俺以上の筋骨隆々な体格を有している筋肉バカで、俺と同様に最前線で戦う事に向いている。ただ、アレフは――アレフ（雄牛）の名の通り、猪突猛進型の単純馬鹿だ。故に上手く先導してやらねば真っ先に自滅するタイプでもある。その点、気を付けねばなるまい。

「境界線に着き次第魔物避けの香を馬車に振りまいた方がいいですね。魔物の巣窟では気休め程度ですが」

小さく、か細い声でそんな意見を述べたのは従士であるケスだ。このメンバーの中では一番若い25歳で、かつ一番小さい。

目を隠すように藍色の前髪を垂らし、鎧の上からフードを被っている彼は一見とても騎士団には見えない。しかしそれでも立派な騎士団の一員であり、防御に関しては他の者の追従を許さないという素晴らしい能力も有している。

魔物避けの香も、ケスが辺境騎士団に入り魔物と戦っていく内に魔物の嫌う香りを見つけ出し、それを液体として凝縮することで作りだしたものだ。その香が出来て以来町の外に出る人々の安全保障が飛躍的に上がり、今や町の外に出る際に欠かせない必須品となっている。

とは言っても田舎町であるエトワールでの出来事なため、遠く離れた王都では未だ流通していない。エトワールの町だけで地味に活用されている便利アイテムなのである。

「ケス、多方面からの攻撃に備えての防備は？」

「準備してあります。とは言っても魔物の耐久度からしてそんなに長くは持たないと思います」

「それで十分だ。少し足止め出来れば一気に仕留めることが出来る」

ちまちまとダメージを与えての長期戦はこちら側が圧倒的に不利になる一方ではない。

エトワールの森に住んでいる魔物の特徴については粗方掴んでいる。それを活用して短期決着を狙う方が安全かつ、確実だ。

「星の泉に落ちたと言っていたけど、竜の卵ってどれくらいの重さなんだろうね。重さによっては引き上げるのに時間がかかる事も考えないと」

「…それもそうだな。引き上げに力を割いている間に魔物に襲われることも想定する必要があるな」

ガタガタと小さく揺れる馬車の窓からは薔薇の花でまだらに色付いた草原が覗いている。

灼熱の夏であっても極寒の冬であっても変わることなく、枯れることなく常に綺麗に咲き誇っている薔薇。この薔薇は旅をする上でいい目印になっている。薔薇の位置を逐一確認しながら馬車は順調に進んでいく。

「今日も薔薇は元気に咲いていますねえ」

俺の視線に気付いてか、アイザックがにこにこ微笑みながらそう言ってきた。

ボルドー大陸中に咲いていて、特に王都周辺は拳ほどの隙間もなく薔薇で埋め尽くされている。この薔薇は特殊で、いくら摘もうと、いくら焼き払おうとすぐ再生する。まさに、枯れることなき薔薇。

——けれども、俺はこの薔薇が枯れた瞬間を見ている。

俺だけではない。アイザックも、アレフも、ケスも、他のメンバーも見た事があるだろう。

今から20年前。俺が、まだ9歳の頃だった時のことだ。

王都にある実家で教育係と共に財政学について学んでいた時——唐突に、それは訪れた。

窓から覗いている庭のワインレッドの薔薇が——何の脈絡もなく一斉に枯れたのだ。

それだけでなく庭の薔薇を摘んで部屋に活けていたものも、まるで急激に水分を吸い取られたかのように枯れた。

それを目撃してしまった時の、教育係の言葉は今でも忘れられない。

——“魔女”が死んだ

一体どういう仕組みなのかは知らないが、ボルドー大陸中に咲いている薔薇は魔女の誕生と同時に咲き、魔女の死と同時に枯れる。しかしその後すぐに新たな魔女が生まれて、薔薇もすぐ綺麗に咲く。だから薔薇が枯れる期間は非常に短い。

「……次に枯れるのはいつだろうな」

ぽつりと、何の意図も意味もなく零したその言葉にアイザックを含む、馬車内にいるメンバーらは緊張したように固まった。薔薇が次に枯れる時。それはつまり、今の魔女が死ぬ時。

「…ヴェド、駄目だよそんな事を言っちゃ」

いつも笑みを絶やさぬアイザックにしては珍しく、至極真面目な顔でそう論してきた。それに同意するように騎士団のメンバーがこちらを見つめてくる。

「確かに今の魔女殿は悪戯ばかりしていますが…でも、悪行を繰り返す魔女も歴史の中にはいたんですし、それを考えると今の魔女殿はいいんじゃないでしょうか」

ベスという女従士がおずおずといった調子でそう意見してきた。炎を思わせる赤色と橙色のコントラストが絶妙な髪を後ろでひとくくりにしている彼女は辺境騎士団エトワール支部唯一の女性で、同じく従士であり夫でもあるヴァヴと共に騎士団メンバーとして尽力している。

「——“魔女”に生き場所なんぞ要らん」

俺とて、そこまで魔女が憎いわけではない。

この言葉にも、そこまで深い憎悪と嫌悪が含まれているわけではない。ただ単純に――ただただ純粹に、魔女が気に入らないだけなのだ。

餓鬼臭い感情だとは思うが、魔女に振り回されてばかりの世界が非情に気に入らないというこの気持ちだけはどうしようもない。

「隊長……！」

何も考えず、深い意味も持たせず発した言葉だったが、ベスにはそう聞こえなかったようで咎めるような声が飛んでくる。
そんなベスを窘めるようにアイザックがひらひらと手を振った。

「まあまあ。ヴェドはただ魔女に振り回されるのが気に入らないだけだよ。ヴェドは生真面目だからねえ」

アイザックの飄々とした態度に当てられてか、ベスは気が抜けたようにはい、と返事して引き下がった。

「それよりも、そろそろ森に入るよ。ここから飛ばしていくからね」

アイザックの言葉に再び馬車から窓を通して外を見てみれば、エトワールの森がすぐそこまで迫っていた。

所々咲いている薔薇に混じって大量に密集している木々で光があまり射さないそこは森というよりも密林に近い。が、いつの時代からあるのか明らかに人為的な、作られた道が森の中まで続いている。それは星の泉まで繋がっている。故に道に迷う事はない……が、何度も述べた通り星の泉付近は魔物の巣窟となっていて、いくら道があるとさえど安心はできない。

「戦闘に備えて武器は常に取りれるようにしておけ」

俺の言葉を合図に馬車の中を剣呑とした空気が支配し、みな一様に武器の位置を確認するように手を武器へと伸ばした。

俺自身も無意識のうちに腰の剣へ手が伸びる。微かに震える指が意味しているのは不安か、それとも興奮か。

「――まあ、」

九割九分、これから浴びるであろう血と死体の雨への興奮だろうがな。

――国王よりの勅命を果たすべく、エトワールの森へ侵入せり

【02..勅命】 了

【03：少女】

首が、飛ぶ。

竜の卵が落ちてきた時の赤い放物線とはまた違う、赤黒い――粘着質な放物線を描きながら首が地面に落ちる。

そして寸前まで首が在った場所からはひと刹那置いてごぼり、と鮮やかな紅色をした液体が発泡酒から溢れ出る泡の如く噴き出した。

そして俺の両手には、赤い筋を幾重にも描いてもなお銀色に鈍く輝く剣。

ぞくぞくと、軀が興奮に打ち震える。

剣の先で柔らかい肉に挿しこみ、そのまま横に引いて肉をこそぎ落とす。肉の付いた刃先を払うかのように剣の面で柔らかく折れやすい鼻先を叩き潰し、潰れた肉を削ぎ落とすように剣を回転させる。それだけで血と肉が散らばり、心地よい死臭が鼻腔を擽るのだから、たまらなく興奮する。

「隊長！右方からも牛型魔物がきます！」

丸太を粗く削った先に毒を塗り込んだ、馬車付属の仕込み槍を発動させながらケスがそう叫ぶ。

藍色の髪に隠れた瞳が周囲を無駄なく見回し、如何にして防御するか思考を巡らせているケスを見て、ふとケスはこのまま順調に経験を積みばいずれは絶対防御を誇る聡き従士となるかもしれない、などと今の状況とはあまりにも似つかわしくない平和的な事を考えて

しまった。

そしてふと気付いたら右方から迫って来ていたはずの牛型魔物の首を飛ばしていた。

もつと意識して肉を断てばよかった、などともったいなさに小さく後悔しながら剣の血を払う。

ここはエトワールの森の、深層部。

エトワールの森に侵入して2日が経ち、星の泉まではもうすぐだろうという段階になった途端に魔物の群に遭遇し、今に至る。全身を黒い毛で覆われ、巨大な漆黒の角の下で金色に爛々と輝く瞳を飢えたようにぐりぐりと動かしながら突進してくる二足歩行の牛型魔物はエトワールの森に生息する主な魔物であり、呼び名はそのまま牛型魔物であったり、ミノタウロスであったり、牛鬼だったり様々だ。

「囲まりました！馬車後方に1体、右方に1体、左方に2体！」

牛型魔物の群を前に馬車は一旦停止し、かねての作戦通り俺とアレフが真っ先に迎え討ち、その間にケスが防備を張った——ところで4体の牛型魔物に囲まれたようだ。

「後方はダレスとヴァヴ。右方はアレフ。左方はヴェド」

アイザックの冷静な言葉に俺は口を吊り上げ、左方から向かってくる牛型魔物に向けて両手の剣を水平に構える。

騎士団に在籍する騎士は基本的に剣士スタイルだが、決して定まっているというわけではない。各々が各々に合ったスタイルを見出し、極め、それで戦う。

アイザックは基本的に頭脳^{ブレイン}として参謀を務めることが多いが、戦闘となると細身の剣を片手に相手を翻弄する。決して力任せに戦うのではなく、むしろ相手の力を逆利用して自滅を促す狡猾なタイプだ。今回のメンバーで俺と同様に前衛タイプであるアレフは巨大な斧を振り回しながら突進する猪タイプ。

そして俺は——長剣に分類されるであろう、一般の騎士には取り扱いが難しい長い刀身の剣を両手に構えて戦うことが多い。2メートル近いこの体格を利用した、双長剣スタイル。

本来ならば両手で扱う長剣を片手で振り回し、かつ両手に持つという暴挙——それをただの“スタイル”として片付けるにはあまりにも無茶が過ぎる。いくら自分に合ったスタイルとはいえ、用途に合わない使い方をしていればいずれ痛い目を見る。だから俺の剣は少々改造してある。

「——らァ!!」

剣のグリップから少し手を離して滑らせ、柄の頭に付いているお飾りの球体を手の平で包みこみ——そのまま遠心力に任せて横に払う。刀身の丈に合わせぬ長い柄。それが俺の長剣の特徴だ。重量のある長剣を片手で扱い、かつ両手で握るというある意味ハンディにしかない要素を補う為に柄を長くし、さらに重量を加えた。

そうすることで一撃一撃の攻撃力を上げ、双長剣スタイルのデメリットである敏捷性の減少も振り抜く速度を上げることで補ったのだ。

勿論、双長剣スタイルであっても普段通りのスピードが出せるよう常日頃から訓練は怠っていない。

そんな俺の払った剣を突進するだけの牛型魔物が避けられる筈もなく——左方から迫ってきた牛型魔物2体の顔面にまとめて一筋の線

が引かれた。

ワンテンポ置いて牛型魔物の鼻先が潰れ、顔面が眼球ごと挟れていく。そんな様を見つめながらにたり、と口元が緩みそうになるのを堪える。

「討伐完了！でも敵の気配はまだします！このまま進みましょう！」

右方と後方の敵も無事倒したようで、ケスがそう鋭く声を上げた。馬車から出した槍をそのままに俺達は馬車に乗り込み、馬を嘶かせて走らせる。

「ケス、魔物寄せの香を振り撒け。帰りは別ルートを使う」

俺の指示にケスは頷き、懷から4本ほどの瓶を取り出し、馬車から思いっきり投擲した。くるくると回転しながら飛んでいく瓶を傍目に、馬車はぐんぐんと進んでいく。

そうしてパリン、という音が微かに耳に届いた頃にはもう馬車は全く別の場所へと移っていた。魔物避けの香を作りだしたケスによる、逆転の発想から作られた魔物寄せの香。このように使えば魔物を別の場所呼び寄せ、その隙に安全を確保できるということが可能だ。しかし魔物避けの香に比べるとうっかり落として割ってしまうなどの不慮の事故が起きた際の危険性が遥かに高い為、これは流通しておらず、ケスしか所持していない。

「星の泉まであと数時間ってところかな」

森全体の地図を広げながらアイザックがそう呟き、馬車内を僅かに安堵の色が包む。

星の泉までの道程は魔物の巣窟となっているだけあって本来ならば厳しいものだが、ケスの振り撒いた魔物寄せの香のお陰で普段より

は楽だろう、という意識あつての安堵の色だ。

「まあ気は抜かないようにね？」

どんなに策を布いていても相手が魔物である以上、何が起こるか分からない——そう言ってアイザックは軽く笑う。

それは勿論、この場にいる全員が承知していることであつたから特に空気が変わることもなかったが。

「それで、ヴェド。星の泉から竜の卵を引き上げることについてだけど」

「星の泉の周囲に魔物避けの香を振りまいた後、かねての作戦通り近寄ってくる魔物は俺とアレフが引き受ける。その間に引き上げを始める」

「オーケイ」

ここまでは順調。これからもおそらく、順調——

そう思っていた、その時だった。

「隊長！！」

御者として馬を操っていた黄土色の癖っ毛が印象的なギーマルという従士から警戒色に満ちた切羽詰まった声が上がリ、馬車内が瞬時に警戒の色を強める。

「魔物の大群が！」

「なに!？」

どういう事なのか聞く前に馬車と御者台を仕切っているカーテンを勢いよく開ける。そうして視界に入ってきたのは、森の奥地に蠢く黒い影の山。

木々や茂み、所々に点在している薔薇に隠れるようにして黒い影が馬車と並走するように一点に向かって走っている。よくよく眼を凝らして見れば牛型魔物の他に鳥型魔物、犬型魔物とありとあらゆる魔物が集結している。こうも違う種の魔物が集まっているというのに互いに争い喰らい合うこともせず、一点に向かって並走している。

「どういうことだ…! 魔物避けの香や魔物寄せの香が機能していないのか？」

「いえ、一応機能はしているでしょう。ただ――魔物避けの香や魔物寄せの香はあくまで魔物の“好き嫌い”に呼びかけているだけですから…それがあまり効果を発出しないとなれば――」

「魔物避けの香や魔物寄せの香以上の“好き嫌い”があるというわけだね」

ケスの言葉に被せてアイザックがそう言い、考え込むように口元に手をやった。

馬車には魔物避けの香が振りまいてあり、魔物は近寄ってこようとしない。けれどもだからといって、絶対に近寄って来ないというわけでもない。そう、先程複数の牛型魔物に襲われた時のように飢えた魔物が嫌いな香を乗り越えてその先の餌を得ようとすることもあるのである。

そしてそれはつい先程魔物を引き寄せる為に振り撒いた魔物寄せの

香についても同様の事が言える。余程の——香を無視してでも喰らいたいと思える“御馳走”が他にない限り、魔物は魔物寄せの香の方へ引き寄せられていくはずなのである。

そう。

つまりは、魔物たちが向かっている場所に——余程の“御馳走”があるということだ。

「失念していた……」

魔物の狙いが何なのか悟ったようでアイザックはギリ、と歯軋りをする。

いつも飄々としているアイザックにしては珍しい表情で、思わず目を見張ってしまう。

「海を挟んだ向こうにある大陸の竜。その竜から受ける恩恵は計り知れない——」

「恩恵？」

「そう。ハンター達の間で竜の鱗や抜け殻、涙に涎に——牙。それらはとんでもない“御馳走”だって言われているんだよ」

町から町へ渡り、森や洞窟を搜索し、魔物から素材を剥ぎ取り、日々旅をしながら暮らしているハンター。

それらの中には別大陸に渡って竜の残骸を求める者もいる。魔物と同じように竜自体と戦い、素材を剥ぎ取ることは自殺行為にしかならぬ為、竜の落とした鱗や抜け殻などを収集する。そうして持ち帰った竜の残骸は非常に高く売れ、かつ竜の残骸自体も道具や武器などに使えば非常に質の高いものとなる。

だからハンターの間では竜の残骸は“御馳走”ということになっている――らしい。

そしてそれは魔物も同様のようで、魔物が竜の残骸を口にすればそれだけで数十、数百倍もの力を得ることが出来るという。実際、竜の残骸を持ち帰ったハンターが魔物の大群に狙われて命を落としたことも少なくないそうだ。

「――成程。そりゃあ…魔物にとって今回の竜の卵は…とんでもない“御馳走”だろうな」

竜の鱗や抜け殻であってもとんでもない恩恵が得られるというのに、竜の“卵”となると――その恩恵は計り知れない。

当然、魔物にとっては何を置いても奪い喰らい尽くしたいモノである。こうして馬車には視線もくれず、魔物寄せの香にも引き寄せられず、ただ一点――星の泉を目指して走っているのも納得がいく。

「不味いね。このまま星の泉に行っても、多分魔物達の奪い合いに巻き込まれるだけだと思う」

「…もう既に卵が喰らわれている可能性も考慮に入れる必要があるな」

それだけではない。

もし卵が無事だった場合、卵を手に入れる為に数多の魔物を相手にしなければならなくなる。それに手に入れた後も、魔物からの追撃や追跡を振り払いながら王都へ行かなければならないのだ。あまりにも――危険すぎる。

「……ケース」

「はい」

「魔物の好む香を知りつくしたお前だ、竜の卵が放つ香についても知りつくせるか？」

俺の言わんとすることの意味を探るようにケスの藍色の髪が揺れる。前髪に隠れてケスの瞳は見えないがケスからの視線は感じたため、まっすぐにケスを見据える。

「――：卵さえ手に入ることが出来たならば、卵自体が放つ魔物の好む香りを打ち消す香を作りだすことは可能だと思います」

小さいながらもしっかりとした力強い声に俺は頷き、馬車内のメンバーを見回した。

「とりあえず星の泉までは行く！卵が喰われていた場合は即時帰還の途につく！卵がまだ無事なようだったら――」

その先の言葉は紡がずとも、みなには分かっているようだった。喉から手が出るほどに欲しい御馳走を前にして、魔物は死に物狂いになる。そんな魔物を数多相手にしなければならなくなるかもしれないという事態に一同沈黙する。

無事竜の卵を手にしたとしても、ケスが竜の卵から魔物を惹きつける香を打ち消す香を作りだすまでおそらく2、3日。その間――魔物からの断続的な襲撃を受けねばならない。

正直――卵には喰われて消えていて欲しい。こちらとて犠牲は出たくない。

「本来ならば一旦戻って王都にスノウバードを飛ばすべきなんだろう

うけどね…それだと遅すぎるし」

「腹括るしかない」

俺は静かにそう言うと、御者台の方に身を乗り出した。

そのまま馬車の屋根の縁を掴み、腕の力だけで軀を上へと引き上げる。馬車の屋根へ登った俺はそのまま剣を抜いて両手に構え、馬車の行く先を睥む。

「星の泉に近付くにつれて魔物も増えていくだろう。そうなるとこちらに危害を加えてくる魔物も現れてくる。ケス、防壁を張っておけ。空からくる魔物は俺が薙ぎ払う——突き進め！」

剣を水平に構え、鋭くそう叫んだのを合図に馬の嘶きが魔物の鳴き声に混じって響き、馬車の速度が急激に上がった。

ガラガラと轟音を立てながら周囲を駆けている魔物の群を追い抜いていく。馬にあまり無茶をさせたくないが、この状況下では無茶をせざるを得ない。馬には悪いが、しばらく頑張って貰うとしよう。

「——っは!!」

ふと前方から黒い塊が飛んでくるのに気付き、剣を力任せに薙ぐ。骨と肉の削げるような手ごたえと同時に、鳥型魔物の残骸が馬車の後方へと飛んでいった。

下では馬車が毒を塗り込んだ槍に加えて魔物の毛と鋼鉄の網を織り交ぜた防壁が形成されていた。これもケスの作ったものである。

「そろそろ星の泉が見えてくるはずだけれど」

馬車内から飛んできたアイザックの言葉に前方を見据えるが、蠢く

黒い影が大量に見えるのみで星の泉は欠片も見えてこない。

「……………」

星の泉は見えてこないが、代わりに——魔物を吊るし上げる巨大な茨が見えた。

奥に集結している魔物が片っ端から茨に絡め取られ、ねじ切られ、無造作に放り投げられていく。その様を見て、脳裏に浮かんだとある最悪の事態に表情が思わず歪む。

「まさか——何故こんなところに!？」

「どうしたの、ヴェド！」

「……止むをえまい、ギーマル!! 停止させろっ!!!」

焦りを孕んだ命令に驚いたのか、御者台のギーマルの黄土色の瞳がこちらを見上げる。

しかし事情を説明している暇はなく、あの茨の射程距離に達する前に止まらなければならなかった為俺は再度同じ事を叫ぶ。

そうしてようやくギーマルは手綱を勢いよく引き、全力疾走していた馬を緊急停止させた。あまりにも性急すぎる停止だった所為か砂埃が舞い上がり、馬車も倒れかけた——が、御者であるギーマルの腕か、なんとか無事に停止することができた。

——その、刹那だった。

巨大な茨が幾重にも重なって——こちらへ真っ直ぐに伸びてきたのは。

「――、」

声を上げる暇も、なかった。

剣を振おうと上がった腕が茨に絡み取られ、軀も身動きが取れぬほどにきつく、何重にも巻きつかれる。そのまま軀が浮き、咄嗟に視線を馬車に向ければ馬車も幾重もの茨に絡み取られているところだった。

まだ新しい茨なのか、棘がそれほど生えていなく――その点は助かった、などと脳の片隅で考えながら視界が茨で覆われていくのを茫然と眺める。

そうして次に感じたのは、勢いよく引き寄せられる感覚だった。胸倉を掴まれて投げ飛ばされる時のような、全身を引っ張られる感覚に茨の本体――草型魔物のところにでも連れていかれるのだろうか、と考えた。

草型魔物。

魔物には多々種類が存在しているが、その中でも一際異彩を放っているのは植物を模っている魔物だ。生態はまるきり植物と同じで、地面に根を張って水分と栄養を得ながら太陽を浴び、成長する。ただし――普通の植物と違い、肉を喰らうことでも成長出来る。そうして成長した草型魔物は普通の植物の数十倍から数百倍の大きさに成長している事が多く、牛型魔物とは比にならぬ危険性を孕む魔物として認識されている。

デスプラントだとか、死を呼ぶ植物だとか別に呼称もあるが、俺は面倒臭い為魔物は大抵なんちゃら型魔物と呼んでいる。よってこいつも草型魔物で十分――

と、現実逃避のつもりなのか取り留めもないことを考えていると唐

突にそれまで軀を圧迫していた茨が解かれた。

「――あ？」

唐突に解放され、自由になった軀は引力や圧迫感の代わりに妙な浮遊感で包まれる。

視界も開け、ぐらりと眼球を動かしてみれば――青く、何処までも碧く輝いている小さな泉と――そのほとりに立つ、ひとりの少女が視界に飛び込んできた。

「あぐっ!？」

見慣れぬ景色に意識を取られていたら、頭と背中に棍棒で強打されたかのような衝撃を受けた。

ぐわんぐわんと頭が揺れ、背中もじんじんと痛みを覚える。しこたま打ちつけたのかそれはしばらく続き、それが収まるまで動けずいた。

「――ッ：はあ」

痛みと息苦しさからようやく抜け、ともに呼吸が出来るようになった頃に俺は初めて、自分が青臭い芝生の上にいるということに気付いた。露なのか、微かに湿っている芝生に放り投げられたようだ。先程の浮遊感は茨が俺をこの芝生に放り投げた時の感覚なのだろう。

両手に未だ剣を硬く握っている事を確認し、それに安堵の息を漏らしながら芝生に手について立ち上がった。平衡感覚が少し崩れてしまったのか、ふらりとよろめきそうになった足を一喝し、しっかりと2本の足で自分の軀を支えたところで――ようやく俺は周囲を見回す。

先程も目にした、何処までも碧く澄んでいる泉がまず、視界に入った。直径20メートルほどのかなり小ぶりの泉である。それなのに土色に濁ることもなく碧く輝いているその泉は——酷く神秘的だ。この泉には何回か訪れたことはあるが、毎度毎度本当に神秘的な泉だといった見惚れてしまう。ぼうつと泉の色に見惚れたままになりそうだった自分の目を奮い動かし、泉の周辺に視線を這わしてみれば泉の周囲をぐるりと取り囲むようにして茨の壁が出来上がっている事に気付いた。

先程、俺をここに放り投げた草型魔物なのだろう、泉を守るように形成されている茨の壁の向こうでは数多の魔物が蠢いている。

「隊長！ご無事でしたか！」

ふいに背後からそう声を掛けられ、咄嗟に振り向けば俺と同じように茨によって引き寄せられたらしい馬車があり、騎士や従士たちもよろめく軀を律しながら立ち上がっていた。馬車を引く馬2頭も伏せてはいるものの、目立った傷はなさそうだ。

——そしてそんな馬車の向こうでも、茨の壁が蠢いているのが視界に入ってくる。この茨の壁はどうやら本当に星の泉を取り囲んでいるようだ。

「ここは星の泉…のようだね」

頭を馬車の壁にでもぶつけたのか、アイザックが錆色の髪をさすりながらこちらに歩み寄ってくる。

アイザックの言葉を肯定しながらふと、先程茨に放り投げられた時に視界に入ってきた少女のことを思い出して顎をしゃくる。

「あの餓鬼は——」

星の泉の傍らに佇むようにして立っていたひとりの、少女。一瞬だったためろくに見ていないが――何処だ？

「ッ！」

再び周囲を見回そうとした俺の耳に一際甲高い雄叫びが届き、即座に視線をそちらに向ければ馬車付近の茨の壁を一匹の牛型魔物が破って入り込んできたところだった。

牛型魔物が破った茨の壁は即座に修復され、そのまま大量の魔物が雪崩れ込んでくるような事態にならなかったことに安堵しつつ剣を構える。

茨の壁の向こうにいる大量の魔物を相手取るとなれば死闘を覚悟せざるを得ないが、牛型魔物一匹であれば片手を軽く薙ぎ払うだけで片付けられる。

――そう考えて牛型魔物の方へ足を一步踏み出した刹那、牛型魔物の眉間に白銀色に輝く短剣が――咲いた。

勿論ただの比喻で、実際には俺の背後から短剣が真っ直ぐに飛んできただけであるが。

短剣を急所にぶちかまされた牛型魔物はそれ以上何かを叫ぶこともなくその場に崩れ落ちた。目先の危険がひとまず去り、次に俺が注意を向けたのは当然――短剣を放った存在である。

「――、」

――12、3だろうか。

短剣を放った存在を確認すべく背後を振り向けば、そこには幼い少女が立っていた。

白きを尊きとし、謙虚であることを美德とするこの国において――女性には基本的に長い髪と長い裾のドレスを身に付ける。肌や脚を見せるような不埒な女は忌避されるし、女の象徴である長い髪を好んで切ろうとする者もない。少女の頃から髪を伸ばし、裾の長いドレスを身に付ける事が“普通”であるこの国で――その少女は、異端だった。

まず目についたのは、細やかな編み目の白い綿織物と黒い綿織物を交互に編んでいる、腿の半ばくらいまであるソックスだった。靴下という存在自体は普通に普及している、たいして珍しくないものなのだが、ここまで長く、かつ横縞模様の靴下は珍しい。と、いうよりも全く見ない。靴下自体脚を保護する為に使われているだけの下着であるため、普通はここまで露出させない。露出させて精々、ズボンとブーツの間から見える部分だけであるし、ドレスを着用する女性に至っては全く見えない。そもそもドレスを着る女性は靴下よりもタイツを着用する傾向にある。

それにも関わらずその少女は脚のラインに沿ったソックスを腿の半ばくらいまで吊り上げており、靴下を吊り上げている黒い革のベルトがソックスに隠されていない白い腿に映えている。

そう。その少女は――脚を曝け出すように、非常に短いスカートを身に付けていた。内側に大量の白いレースが繕ってある黒いスカートをひらひらと風に靡かせている。少し動けばスカートの中身が見えそうな程に短いそれは俺の29年の人生においてたったの一度たりとも見た事のないものだった。あまりにも不埒なその格好にくらりと眩暈を覚えつつ、少女の上半身にも意識を向けた。

黒いスカートとは対照的に白い、レースがふんだんにあしらわれた

ドレスシャツは下半身と違っておかしなところはなく、そこに少しほっとしたがそもそもドレスシャツは上着の下に着るものであり、こうして外に出ている時に上に何も羽織らないのはおかしいということにやはり眩暈を覚える。

ソックスと同様に軀のラインにぴったりと沿っているドレスシャツは少女の未発達な体軀をよく表していて、王都にいる物好きな貴族が見れば喜びそうだななどとくだらないことを考えてしまった。

全体的にモノクロな服装をしている少女の軀も、全体的にモノクロであった。病的なまでに青白い肌は一見すれば白いドレスシャツと区別しにくく、何より――常闇のように黒いその髪と瞳がなおさら少女のモノクロさを際立たせている。普通に切り揃えていれば絹のようにきめ細やかな髪であつたらうそれを切り乱した散切り頭は長い髪を女性の美徳とする風習のあるここにおいてあまりにも異常で、けれどけぶるような睫毛の下で暗く、鈍く輝いている何処までも深く、何処までも暗い闇のような瞳に漆黒の散切り頭は何故だか似合っているとは無意識のうちに思ってしまった。

白い病的な手を際立たせるかの如く、黒い塗料を全ての爪に塗りたくっていたのも異質にしか映らなくて、目の前の少女はヒトではなく魔物なのではないのかという思考に取りつかれそうになる。

そして少女の黒真珠のような瞳が放つ異彩な輝きが自分を真っ直ぐに見詰めていることに気付いてぞくり、と悪寒を覚える。闇に吞まれるような、闇に蹂躪されているような感覚で背筋がぞくぞくと粟立っている。

「やあっと来たア」

それが、少女の第一声だった。

そして――俺と少女の、出会いでもあった。

【03 :: 少女】
了

【03：少女】（後書き）

2011. 10. 30

とりあえず3話まで投稿です。

更新はスローペースになりますが、よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0587y/>

魔女の騎士(イヌ)

2011年11月12日20時19分発行